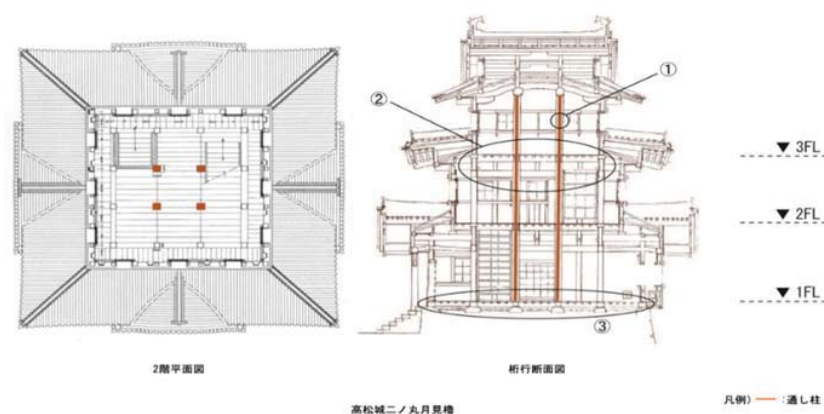


第12回 小田原城天守と現存天守との比較④

今回は天守ではありませんが、宇和島城天守と同じく宝永度小田原城天守（宝永 3/1706 年）と建造年代の近い、高松城二ノ丸月見櫓（延宝 4/1676 年）をご紹介します。前回と同じように①通し柱②指物の使い方の違い③土台の有無を見て戴きたいと思います。



「高松城二ノ丸月見櫓」(写真:著者撮影)



小田原城天守と建造年代の近い 「高松城二ノ丸月見櫓」(以下、高松城月見櫓)

高松城月見櫓も同様に層塔型の3重3階です。小規模ですが各重の軒の出が比較的深く、長押が黒漆喰で仕上げられるなど外観意匠は洗練されています。しかし内部はこれまでの天守と比べて少々窮屈で荒々しい印象です。

宇和島城天守と同じく、各階とも正方形の平面がそのまま通減している層塔型の方式です。特徴的なのは1階から3階までを貫く4本の①通し柱が使用されていることです。②指物は身舎外周部の床梁と通し柱とを繋ぐ床梁とに使用されています。③土台はこれまでの天守のように柱が建つ位置に格子状に配されています。

柱と指物の構成をみると、3重の側柱と初重、2重目の身舎柱(管柱)は上下で揃っており、初重と2重目の身舎柱はその側柱から指物によって直接繋がっています。つまり4本の通し柱には2重目屋根以下の鉛直荷重がかからないような構成になっています。これは第7回でご紹介した、小田原城天守の身舎柱(通し柱)へかかる荷重を低減しているのと同じような方法だと言えます。

図版出典：『重要文化財高松城二ノ丸修理工事報告書』
※個々の写真・図版のSNS等への転載はご遠慮ください。

特定非営利活動法人「みんなでお城をつくる会」 〒250-0042 神奈川県小田原市荻窪 4385
http://www.odawara-oshiro.org Tel:0465-46-8944 Fax:050-3488-2039 Mail:info@odawara-oshiro.org



守屋 新市長との懇談

2020年7月8日



5月17日の選挙で新市長に選ばれた守屋輝彦氏は元々私たちNPOの会員のお一人でもあります。7月8日に大変お忙しい中お時間をいただくことができ、NPOメンバー9名で庁舎にて守屋新市長との懇談をしました。与えられた30分という限られた時間ではありましたが、要件を濃密に話し合うことができました。これまでの当NPOのやってきたことのおさらいの後、市へ望むことを以下のように伝えご理解をいただきました。

- ・文化部、都市部、経済部、環境部をまたぐ「(仮称)歴史・観光・まちづくり部」の新設
- ・新設の部の中に「天守木造再現委員会」を組織化
- ・アーバンデザインセンター構想の中にお城の課題は大きな位置づけにすること
- ・当NPOが博物館などの資料公開や閲覧を行う際に市が強力に援助
- ・研究者の招聘費用の市からの援助
- ・城郭整備基金の中に「御用材プロジェクト」などの小箱を作る

それに対して、守屋市長からは、

「まちづくりは、市民をはじめ多くの関係者の同意形成が重要であるので、それが迅速かつ確実に進んでいける体制をしっかりと作ることをお約束したい」というお言葉をいただきました。

当NPOとしては、これまで以上に市との連携を密にし、天守木造再現に関わる課題の進捗に加速がつくようにしていきます。

第10回 小田原城天守と現存天守との比較②

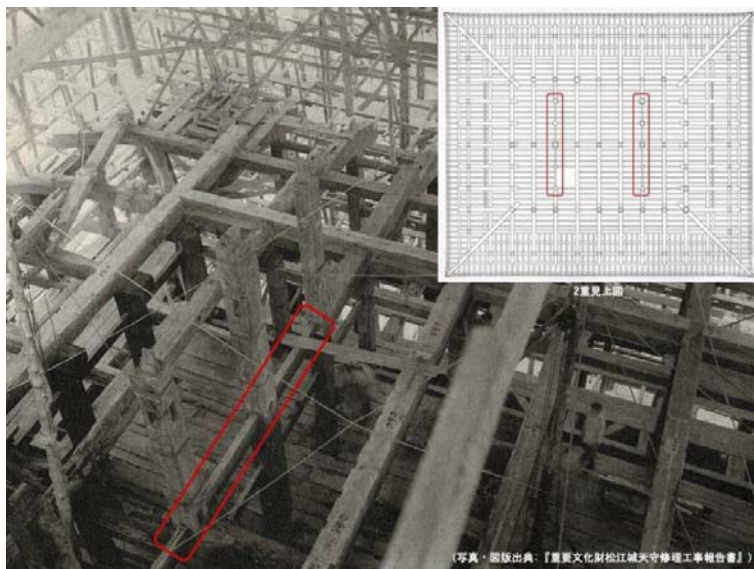
間遠くなってしまいましたが、今回は前回ご紹介しました松江城天守に使用された指物の中でも、非常に特徴的な例を取りあげたいと思います。まだ仮説に過ぎませんが、著者は小田原城天守にもそのような指物が使用された蓋然性は高いと考えています。

松江城天守に使用された「扱き梁（こきはり）」

松江城天守には独自の通し柱の構成があることを前回ご紹介しましたが、それらを繋ぐ指物の中で、著者が「扱き梁（こきはり）」と呼ぶ部材があります。下の写真で白い丸で囲った箇所ですが、通常の指物と成（高さ）は同じで幅が薄い部材です。左側の写真、その「扱き梁」の下段で柱にささる部材は「貫（ぬき）」ですが、貫よりも幅が広く、また床を支える構造材でもあります。



松江城天守2階床梁（著者撮影）



修理工事報告書にもこの部分の写真や図面がありましたが、残念ながらこの部材についての詳しい記述はなく、どのような理由で（部分的に）使用されたのかははっきりとはわかりません。おそらく構造的な理由というより、柱の断面欠損の軽減や材料の節約、または柱と指物を組み立てる際の施工性に関わる理由ではないかと考えています。

いまのところ現存天守でこのような「扱き梁」を使用した例を確認できていませんが、近世民家の一部には使用例があります。また「小田原城三重天守引図」にも「扱き梁」ではないだろうと思われる表現がありますので、追ってご紹介したいと思います。

第11回 小田原城天守と現存天守との比較③

今回は、宝永度小田原城天守（宝永3/1706年）と建造年代の近い、宇和島城天守（寛文5/1665年）をご紹介したいと思います。小田原城天守より規模はグッと小さいのですが、松江城天守と同じように①通し柱②指物の使い方の違い③土台の有無を見て戴きたいと思います。

小田原城天守と建造年代の近い「宇和島城天守」

宇和島城天守は小田原城天守と同じ層塔型で、規模は3重3階です。入口は唐破風を持った玄関が付いており、平和な時代の天守の様子が伺えます。また内部は木組みや材料の仕上げ方など、とても洗練されているなどという印象でした。ちなみに宇和島城天守にも天守雛形（模型）が残存しています。

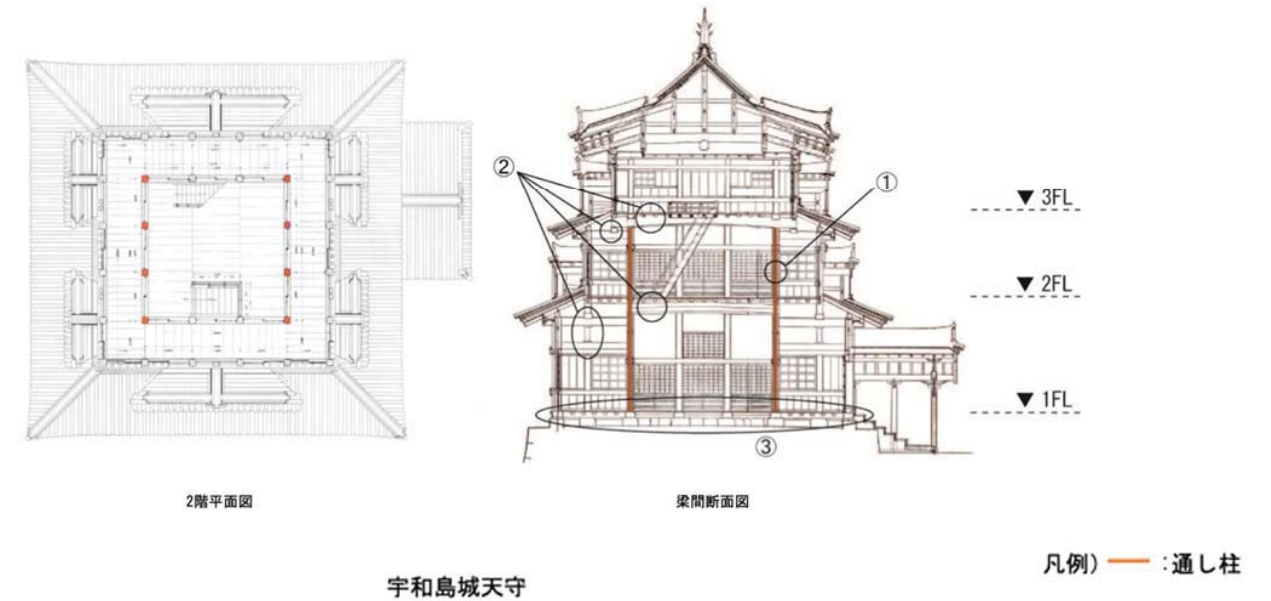


「宇和島城天守」（写真：著者撮影）

各階とも正方形の平面で、上階に行くに従って少しずつ小さくなっており、小規模ですが層塔型の方式がよくわかる事例です。

1階から2階の身舎に①通し柱が使用されています。②指物は2階の床を支える梁間方向の大梁や、身舎と入側を繋ぐ梁などに使用されています。③土台は柱が建つ位置に格子状に配されています。

特に通し柱と指物による構成をみると、通し柱は初重、2重目の側柱（一番外側の柱）から指物によって直接繋がれていることがわかります。また、通し柱の頂部に架かる梁は3階の床梁で、かつ3重目の側柱が載っていますので、この通し柱に架かる鉛直荷重は非常に大きいことがわかります。



図版出典：『重要文化財宇和島城天守修理工事報告書』